

# ドリの流儀

tatsuya

## まえがき

僕はドリブルを武器に、プロまで登りつめたサッカー選手ではありません。

それどころか、小・中・高校のいずれかで名を馳せたといった過去の栄光さえ持ち合わせていない、ごく普通のサッカー人生を歩んできたサッカー人です。この本を今手にとつてくださっている皆様と少し違うであろう点を挙げるとすれば、

- ・プロのフリースタイルフットボール パフォーマーである
- ・僕のドリブル指南を受けたいと言つてくださる方が少なからずいらつしやる

この2点でしょう。

僕の根底には、フリースタイルフットボールを発足した頃よりプレーし、RAPAZ（ラパス）というユニットを組んでいるということがあります。

ありがたいことに全国でイベントやテレビ番組などに呼んでいただき、パフォーマンスを披露させていただいています。

僕が携わるすべての活動はこの根底の拡大に紐づいています。ただ、何一つ算段のついていない先行きが不透明な事業であることは一番の悩みなのですが、それはひとまずおいておきます。興味をお持ちいただけましたら「RAPAZ」で検索してみてください。

なぜ何の結果も残していない普通のサッカー人の僕のもとに、ドリブル指南を受けにくる人たちがいるのか？

僕は高校3年生の時にフリースタイルフットボールを始めてから、競技のサッカーには背を向けて、5年ほどの間没頭し続けました。

少しずつパフォーマンスのお仕事をいただけるようになってきた頃、あるイベント制作会社の方からフットサルに誘っていただきました。お付き合いのつもりで参加し、久しぶりに競技の球蹴りに舞い戻ることになりました。

久しぶりの対人プレーで、何一つ思う通りにプレーできず……となるものだと思っていました。ところが、驚くほどボールを相手に奪われない！ もともと学生時代も、足元の技術

が長所のドリブラーではありましたが、「こんなにも簡単にDF（ディフェンダー）を抜き去れるものなのか!？」という快感を抱いた僕は、すぐにまた競技としてのサッカー（フットサル）の虜になりました。

RAPAZとして仕事をする傍ら、誘われたフットサルには予定の合う限り参加しました。競技を楽しんでいた僕は、オフシーズンのJリーガーやFリーガー（フットサルのプロ選手）と、遊びでフットサルをさせていただけの機会が徐々に増えていったのです。少年時代の僕の夢を叶えた人たちとのプレーは、まさに夢のようなひとときでした。その中で、プロの人たちからいただいたのは「君、足元すごいな!」「その子、ドリ気をつけろ! 抜かれるぞ!」といった言葉でした。もちろん、プロのフリースタイルフットボーラーとして参加している僕の立場に気を遣っていたいただいたお世辞であることは百も承知ですが、それでも彼らの言葉は、僕に自信を持たせるには十分でした。

そこで、某サッカー情報番組のコーナーでスター選手が出すリフティング宿題について、解説動画をYouTubeで配信していた僕は、新たな視聴者獲得のために自分がプレーしている様子を撮影し、ドリブルで抜けたシーンを解説する「実践ドリブルバイブル」なるものを配信

してみることにしました。

批判コメントや誹謗中傷ばかりが集まるのではないかという不安をよそに、動画には好意的なコメントやDFの重心の見分け方、タイミングの取り方などドリブルに関する質問をしてくれる人たちが出てきました。

運良く発足時からフリースタイルを始めて、運良くステージに立たせていただいた結果、多くの人との繋がりができました。

その中で、プロのサッカー選手と身近に接する機会を与えられ、忘れていた「プロサッカー選手の夢」と、自身がその「夢に破れた人間」だという現実を思い出すことになりました。そんな僕にとって、僕のプレーに憧れや尊敬を抱き、参考にしてくれる人たちが現れたことは、破れた夢を少しずつ拾い集めて、ちよつぱり夢が叶ったような錯覚を見せてくれました（笑）。

そうした日々を過ごすうちに、「永井義文」という同い年のプロのFリーグと特に仲良くなり、共にフットサルクリニックやチャリティーイベントを開催する機会が増えるようになりました。

ある日、ドリブルスクールなるものが存在することを知った僕は、自分もドリブルスクー

ルをやるうかと考えていることを彼に話し、需要はあると思うかを尋ねました。彼は手放しでこの話に賛同して背中を押してくれたばかりでなく、実際にSNSなどで情報拡散に大きな貢献をしてくれました（この話は後述します）。

こうしてドリ塾と「Tatsuya TUBE（僕のYouTubeチャンネルの名前）」のおかげで、僕のもとにはドリブルの指南を受けにくくれる人たちが現れたのです。そして、そのドリ塾のホームページが担当者の方の目に留まり、この本を出版させていただく運びになりました。

『ドリの流儀』ということで、ドリブルに重きを置いた内容にはなりますが、ドリブラーのみならず、自分のプレースタイルに信念を持ち、それゆえにプレーヤーとして悩んでいるパーサーやストライカーにも、

「自分のスタイルに信念を持ち、貫く大事さ」

また逆に、

「貫いてきた信念を曲げる覚悟の大事さ」

をお伝えし、今後の選択の手助けになれば幸いです。



サッカーについて語る……ではなくアナ雪を語る  
永井選手と筆者